

## 学界動向

### 一九六五年度歴史学研究会大会

一九六五年度の歴史学研究会大会（五月一五、一六日）は、アメリカ帝国主義のベトナム、コンゴ、ドミニカ等への公然たる侵略をはじめとする帝国主義諸国の新植民地主義の跳梁、中ソ論争を頂点とする正統派と修正主義との対立、あるいは日韓会談や三矢研究問題に象徴される日本の帝国主義的侵略企図や教科書検定にあらわれた研究・教育にたいする統制等々、複雑で流動的な国際状況および国内状況のなかでもたれた。だから、この大会が担う課題は、必然的に、歴史研究者がこのような世界史的状況のなかで世界史変革のためにどう主体的に参加し、同時に、研究者として変革の歴史法則を新しい歴史理論をどう構成してゆくか、ということであった。そのことは、とりわけ、帝国主義的歴史観であるロストウ・ラインシャワーの近代化論が、その非科学性にもかかわらず、歴史学者のみならず隣接諸科学者の間に急速に伝播し、彼らを組織化しつつある時点においては、全く遅播きの非難

をまぬがれないが、火急の課題なのである。

「ベトナムにおける侵略戦争と『日韓会談』に反対する決議」や「教科書検定に関する反対声明」の採択という熱っぽい雰囲気は総会の席上に渦巻いていたが、しかし他方では、原稿が集まらないとか会費納入率が低下したとかいう被告にみられる日常的研究活動や組織軽視といった二律背反の現象になやまされたのは、私だけではなからう。ここに火急の課題認識とその方法的整序が、歴史研究者の間でまだ果されていない証拠が如実に示されている。

ところで、研究報告は第一目に古代・中世・近世・近代・現代各部会の総合部会として、「東アジア歴史像の検討」（遠山茂樹・大江志乃夫両氏の報告）からはじめられ、第二日目にはそれをうけて、各部会の分散会がもたれた。わたしの出席した近代史部会は世界資本主義における「後進国の階級構造」を統一テーマにして、川本和良（「似而非ポナバルティズム社会構成の原型形成」）、中村義（「形成期帝国主義下における清末の階級構造」）、権寧旭（「日本帝国主義下の朝鮮労働事情」）の諸氏が実に詳細をきわめた報告を行った。その内容については、『歴史学研究』三〇〇号と三〇三号に掲

載されており、その討論要旨も三〇三号に整理されているので省略することにする。

## 二

さて、印象批評のない方になるが、わたしだけでなく出席していた多くの友人達にとっても、本年度大会の庄巻は何といつても遠山報告であった。そして実際のところ、その遠山報告は、歴史研究者がそれに賛成すると否とにかかわらず今後の歴史研究の方向を模索するうえで、方法上の基本問題をなげかけているといつてよい。そういう意味で、少し遠山報告を整理し、わたしなりに疑問点をあげてみることにしよう。

遠山氏のすぐあとでふれる論理構成のための出発点は、①現在、東アジアが世界史における矛盾の結節点であり、帝國主義諸国家の新植民地主義とそれに対する民族的抵抗が世界史総体の構造変革の起動力とさえなっている、②この新しい世界史創造の実践にどう参加してゆくかがわれわれの問題であり、③そのためには、日本帝國主義が新しい世界史の発展方向にたいしてどのような役割をもっているか、そしてわ

れわれ日本人民がそのことにたいしてどのような責任をもっているかを自覚し反省する必要がある、ということである。こういう問題意識から、遠山氏は「東アジアを核とする世界史認識」の必要性を強調され、その論理をつぎのように構成される。すなわち――

世界史というのは「発展段階・社会経済構成体を異にする諸民族の歴史の構造的な複合体」である。そうだとすれば、ブルジョア史学やソビエット・アカデミー『世界史』のような、世界史の発展段階を先進国を基準とし、先進国の発展段階が後進国の歴史発展を規制し、後進国は先進国のあとを追ってその発展段階まで達するというような考え方はとらえられえない。なぜなら、そこでは後進国が先進国の歴史に反作用をおよぼすという問題が見落されるばかりでなく、複合体としての世界史の「構造と発展法則が時代によって変わる」という局面も評価できないからである。そこで「世界史の時代区分はその構造の基本的変化を指標」として改めて設定しなければならぬ。その指標にもとづいて、世界史は、  
(1) 古代世界帝國の時代……古代世界帝國の領域を単位とする  
複数の歴史的世界の並立時代。

- (2) 古代世界帝国解体過程の時代
- (3) 資本主義の世界市場形成過程の時代
- (4) 帝国主義の時代

(5) 帝国主義崩壊過程の時代（第二次大戦後の時代）

という五つの時期に区分される。遠山氏は、大会報告では(3)、(4)、(5)の時代を取上げて、それぞれの時代の構造的特徴点のみを述べられた。(3)~(5)において注意すべきことは、①世界資本主義ないし帝国主義の法則が前近代的社会構成体をもつ諸民族の歴史発展の法則と激突し、その激突を通して前者の法則が勝利し貫徹するが、それだけに世界資本主義の矛盾は拡大し、しかもその抵抗運動が(4)以後はインターナショナルの性格をもつこと、②こうした世界史の発展構造をとらえるためには、世界史総体のもつ矛盾の結節点としての地域史とりわけ東アジアのそれを媒介とすることが必要である。なぜなら、(3)の時代には欧米資本主義の「植民地化政策に直面した諸民族は相互に依存しあい、あるいは対抗しあう」という具体的関連もつことにおいて地域史を構成し、(4)(5)の時代にも東アジアは帝国主義の世界史的矛盾の結節点・爆発点をなす「地域」であるからである。

このように、遠山氏は、複合体としての世界史の構造の基本的変化を指標として新しい時代区分を提唱するとともに、地域史とりわけ東アジア地域史をそれぞれの時代の世界史の構造のなかに位置づけることによって、世界史の発展法則と一国史の発展法則とを有機的・統一的にとらえようとする。この積極的試みは高く評価すべきである。だが、この提唱にはいくつかの疑問がある。紙数の関係上、まず、素朴な疑問だけをここでは提出しておこう。

①たしかに、ある一定の時代の世界史は、発展段階を異にする諸民族の複合体から構成されている。このことは疑いもない事実である。だが、遠山氏が設定された五つの時代区分のための指標である「構造の基本的変化」の内容について疑問がわく。遠山氏は、「構造」を「基本的」に「変化」させるものと、マルクスの設定した一国史の「構造の基本的変化」≠発展段階との論理的連関についてはほとんど説明されていない。ただ、いわれていることは、後進諸民族は先進諸民族におくれながらも同一の道をたどるとみることや先進国家が後進民族ないし国家を一方的に規制するといった考え方は、今日のいわゆる民族運動の世界史に果している役割から

するとき正しくない、ということである。しかしこうした理由だけでは、マルクスの発展段階説を世界史の時代区分のさいに事実上否定し去るには充分ではなからう。なぜなら、マルクスにおける「構造の基本的変化」とは生産力と生産関係の矛盾を通しての社会構成体の変化のことであり、これにたいして、遠山氏においては国家ないし民族の問題として論じられているからである。たしかに、世界という場においては、国家ないし民族間の対立 $\parallel$ 抗争ないし連帯が現象上のすべてをおおいつくしている。そしてそれが世界史の動向を決定づけているようにみえる。だが、国家というのは、いうまでもなく上部構造なのであり、それは、その時代のそれぞれの下部構造によって規制されているものなのである。このことは遠山氏にとっても自明のことのはずである。そうだとすれば、下部構造を規定要因とする世界史の構造把握という視角にたたないかぎり、マルクスの社会発展の法則を世界史に発展的に適用したことはならないのではなからうか。数年前に世界的規模で論争が行われた一国史の時代区分にかんする論争は、わが国でもまだ結着をみていないと思われる。一国史の時代区分の理論的・実証的指標についての整理がまだ

充分にはなされていない現状では、世界史の時代区分がいかにもむずかしいかということはいうまでもない。遠山氏の大胆な提議は、たしかに一国史の内部だけで時代区分を論じる方法にたいする、あるいはまた、先進国を基準にする世界史の時代区分にたいする手痛い批判としての積極面をもっていることは否定しがたい。しかし、一国史の発展法則ないし時代区分の方法と世界史のそれとをどのように理論的・実証的に接合するか、という基本的問題は依然として残るのではなからうか。たとえば、一国史の法則的發展という局面からいえば、封建制は古代的なものより進歩した段階であり、その構造変化を確定するために中世史家たちは農奴制の成立や中世国家の究明に全力をそそいでいる。遠山氏においては、(2)の古代帝国の解体過程として表現されているが、なぜその時代を中世的世界の形成としてとらえてはいけないのか、という問題が残るのである。

②遠山理論の積極面の一つとして、一国史の発展法則をみる場合に世界史との相互作用を無視してはならない、という点をあげることができる。だが、このことは、いつの時代であれそうでなければならないということにはならない。いいか

えると、世界史的状況が一國史を完全に規制する時代と必ずしも規定的役割をもたない時代とがある。遠山氏もこの点は指摘されている。だが、氏の場合には、その区別があまり明確ではないように思われる。生産力が低く、労働過程構造したがって再生産構造において格段のちがいが民族ないし国家間においてみられない古代的・封建的世界史の時代においては、いわゆる世界史は構成されず、地域史という範囲すら厳密な意味では構成されえないと思われる。たしかに、その時代においても、氏がいわれるようにギリシア、ローマの世界、オリエントの世界、インド中心の世界、中国を中心とする世界というものが考えられることは事実である。だが問題は、これらの複数の歴史的世界のそれぞれの内部における国際構造と一國的構造との有機的関連なるものが、果して、一國の構造を国際構造が変化させるほどのものとして作用したのかどうかにある。これは氏の区分による第三の時代以降の特徴を明確にしておくためにも必要なことである。つまり、古代的・中世的世界における一國史と世界史との構造の関連および法則性と近代以降におけるそれとを同一視していいかどうかということがある。それは実証の問題より以上に理論の問題

題である。

一國史の發展法則が促進され、あるいは飛躍して、いわゆる単系發展的法則を歪曲しはじめるのは、遠山氏の時代区分でいえば、第三の資本主義の世界市場形成過程の時代以後のことである。生産力および再生産構造したがってまた国家間の格差は、この時代とりわけ産業革命以後に決定的となる。だが、同時に、植民地ないし半植民地の民族運動のあり方を規制しあるいは方向づけるのは、ブルジョア革命≡ブルジョア国家体制であり、その經濟構造としての資本主義体制である。この抑圧と抵抗の過程が一國史的發展法則の促進ないし飛躍を生む。世界史は、この時代以後に、はじめて複合体としての構造的特徴をもつに至る。「外圧に対抗」する諸民族間のダイナミックな依存と対抗をとらえようとするとき、右のような内容においてとらえるべきではなからうか。同じことは、第四の時期の、とりわけ一九一七年以降における世界史の構造矛盾についても指摘できるであろう。この第四、第五の時代については、紙数の関係上、機会を改めて論じることにする。

(後藤 靖)

### 日本経済政策学会第二十二回大会

春雨がけむる五月二十九日（土）三十日（日）の両日、「日本経済政策学会」第二十二回大会が立教大学で開催された。

本学部からは、井上敏次郎会員、山田邦臣会員、筆者の三名が参加した。

一日目は、第一部会と第二部会に分かれ、各「報告」をめぐって、質疑応答が展開された。第一部会はいわゆる「地域開発」問題を研究、討論の柱とし、つぎのような報告がなされた。

藤井隆会員（名古屋大）の「地域開発と経済力集中」、酒井正三郎会員（南山大）の「中部経済圏の圏域画定について」、平山喜久雄会員（福岡大）の「北九州工場地帯の経済構造と機械工業」、西岡久雄会員（青山学院大）の「いわゆる二大地域問題について―特に地域間較差について」、吉沢栄藏会員（東海大）の「商業立地診断の実態―静岡県中小企業指導所の実績の評価」であった。

第二部会は、わが国の産業構造に問題点をみだし、現状分析をふんまえた上で展望を与えることを試みた。すなわち、

石井金之助会員（需要研究所）によって「わが国食品工業の構造と発展方向」が報告され、百々和会員（神戸大）によっては、「産業組織政策と競争の有効性基準」が明らかにされたのである。

続いて、第二部会は、いわゆる「二つの経済体制」に焦点をおき、後藤文利会員（近畿大）が「近代社会主義」概念と題してカテゴリー面から問題設定をなし、長尾周也会員（竜谷大）によって「資本主義経済体制と階級構造」が問われ、秋山穰会員（都立短期工大）によって特定の国の現実問題の状況としてイギリスを照射し、「戦後イギリスの資本蓄積構造と国家投資・公債・金融政策」と題する研究成果が報告されたのである。

二日目は、共通論題「現代世界の経済体制と経済政策」という統一テーマに対して、四つの分析視点を設定することによって接近が試みられた。

まず第一の問題視点「資本主義体制の最近の変化とその経済政策」はどのようであるか。（報告者、力石定一会員／法政大▽討論者、宮崎犀一会員／国学院大▽）。第二のそれは「社会主義体制の最近の変化とその経済政策」はどのよう

あるか。(報告者、木原正雄会員〔京都大〕討論者、加藤寛  
会員〔慶応大〕)。以上資本主義ならびに社会主義の両体制  
を個別的にとらえ、それぞれの規定的問題状況とそれに対す  
る政策的対応関係を吟味し、しかる後、第三の視点が国際的  
諸関係に設定される。すなわち「両体制の変化と国際経済政  
策」がそれである。(報告者、水田博会員〔国学院大〕討論  
者、久保田順会員〔関東学院大〕)。以上、両体制のマクロ  
的分析をふんまえた上で、ではわが国の経済は今後どのよう  
な進歩でどこへむけてゆこうとしているのか、といった問題  
が必然的に問われなければならない。すなわち第四の視  
点「両体制の変化と日本経済政策」がそれである。(報告者、小  
林義雄会員〔専修大〕討論者、中村隆英会員〔東京大〕)。  
共通論題をめぐって、以上のような四つの分析視角のもと  
で貴重な報告がなされるとともに、活発な質議応答が展開さ  
れたのである。(浜崎正規)